

女性が経済界などで果たす役割を話し合う「日中韓女性経済会議2006」(実行委員長・川口順子参院議員・元外相)が二日、東京都内で開催された。その一環で女性の活用について意見交換したパネリストたちに、各国の現状や課題を聞いた。

「日中韓女性経済会議」参加者に聞く

韓国

社内保育 国も推進

申受娟(シン・スヨン) 対外経済・通商大使・韓国女性経済人協会名誉会長
宋恵子(ソン・ヘシヤ) コリアベンチャー・エアベンチャー・Eジネ・スワイメンズ・アンシエー・シヨン会長



韓国では高学歴で優秀な女性が非常に増えていて。大学を首席で卒業するのはたいして女性。

女性をうまく活用しなければ、優秀な人材の確保は難しいという意識が企業の間で高まっている。政府も後押ししている。例えば一定規模以上の企業は社内保育所を設置する



意見をかわすパネリストたち

ことなどが定められている。おそろく来年からは妻の出産時に夫が有給休暇をとる制度もできそうだ。背景には少子化の問題がある。合計特殊出生率は二〇〇五年に一・〇八と(二〇〇五年に一・〇八と)経済協力開発機構(OECD)主要国の中でも低い。その回復のため急ピッチで制度を整えている。

中国

育児分担 当たり前



熊雷(シュン・レイ) 首都女性ジャーナリスト協会 副会長 呉儀

ただ一度仕事を辞めると、再就職が非常に難しいという問題はある。日本と

め多くの女性が企業や社会で地位を得て、影響力を発

生活 ワーキングウーマン

然に考えている。企業の育児支援や託児所が充実、子育てで休んだことが処遇に響くこともほとんどない。私の同僚は六年間記者の仕事を手を離れていたが、子どもに手がからなくなると復帰したあと活躍、会社からも非常に評価されている。政府の指導者から普通の農民まで男女の区別なく働き、女性も様々な分野で大きな役割を果たしている。

女性の意欲 どう生かす

同じように子どもを自分の手で大切に育てたいという思いも強く、女性たちは育児期のキャリア中断との間で板挟みを感じている。家庭と仕事という二匹のウサギを手放すまいと、必死に働いているのが現実。特に夫の家事・育児への参加はごく当たり前。お互い働いているのだから、家の度合いに差があり、それは分けて考えなければならぬ。

日本

学びたい 他国の例

若田喜美枝(いわた・きみえ) 資生堂取締役執行役員 韓国の女性活用の現状は日本に近い。出産を控えた女性の多くが仕事を辞め、数年間育児に専念して再就職する。こうした大きな職業上の中断があるのは、主要国ではおそろく韓国と日本だけ。管理職に占める女性比率の低さや、女



性に非正規で働く人が多いことも似ている。制度が整いつつあるとはいえ、女性がまだ子育てにより仕事に軸足を置いて、必死でがんばらなければ管理職になれない点も同じ。見習いたいのは韓国の女性起業家を支援する仕組みだ。政府が資金面で援助し、女性経営者たちが受け皿となって情報提供などをしている。

女性経済会議は昨年の京都に続いて二回目の開催。今回は三カ国の経済人、政府関係者ら約百二十人が参加し、女性活用のほかにも経済、文化交流のあり方、IT(情報技術)活用などのテーマで議論した。基調講演した早大客員教授で前内閣府男女共同参画局長の名取はにわ氏は、「成功事例を学び合うことは重要。特に少子高齢化への対応は多くの先進国で

120人集い交流

共通の課題になりつつあり、克服に向けて女性の経済人が果たす役割も大きい」と語った。実行委員長を務めた川口順子氏は「政府間でいろいろな問題があったとしても、国際交流の基礎は常に個人。そのつながりが日中韓三国の良好な関係を支えていくと思う。今回の会議で築かれたネットワークをそれぞれで形を膨らませてほしい」と締めくくっていた。